



山桜会創立90周年と 学院創立120周年

理事長 大木 令司

山桜会創立90周年をお祝いたします。

山桜会創立90周年おめでとうございます。

今年は山桜会創立90周年であるとともに、追手門学院大学創立40周年の年でもあります。学院創立120周年の2008年まではいよいよあと2年と迫りました。

既に山桜会では様々な90周年記念事業を実施、あるいは準備をされております。3月18日には、福井俊彦日本銀行総裁を招かれて記念講演会を開催され、成功裡に終わりました。この催し物は山桜会が主催されましたが、学院もこれに協賛させていただきました。

小学校の卒業生で指揮者として国際的に活躍をされている湯浅卓雄氏を招いての記念コンサートは山桜会、学院の共同主催となっております。母校の輝きは卒業生の輝き、卒業生の光は母校の光という考え方はこうした共同行動の中で象徴的に表現可能となります。

山桜会90周年記念事業委員会の委員長である秋山陽彦氏は「山桜會報」で「山桜会90周年は学院120周年の一環であり、しかもその引き金となるべきであると考えます。」と書いておられます。それは母校への支援を念頭に置かれた貴重なお言葉であると受け止めております。

苦渋の時代を越えて

学校運営と学校経営の間で…

追手門学院は「独立自強の精神」の涵養を教育理念としてきました。いわば自立の意識を育くみ、十分な学力を与えることを目標としてきたと理解しています。そして、生徒・学生の喜び、保護者の喜びを教職員、関係者の喜びとしてきました。

数年前に茨木・大手前の両中・高等学校で定員割れの現象が生じた時は、関係者に大きな衝撃が走りました。これが学院運営に対する根本的な反省をうながすことになりました。今では両校で志願者が増加し、入学者も確保されて極めて順調な結果を生み出しており、そのお陰で財政も急速に好転することとなりました。しかし、長い年月の推移の中で施設設備の老朽化が進んだため、建設事業の推進が必要となってきました。反省はいわば学校運営と学校経営の間に一線を画することに繋がったように思います。先生方の学校運営が学校経営とイコールであった時代は就学人口の急増期のことであり、急減期では民間経営の手法に学ぶ必要が生じたのです。この間の学校経営の見直しは苦渋の時でありましたが、教職員の方々や関係者の皆様方のご理解ご協力によって学院創立120周年記念事業の推進とともに光が見えつつあるのが現在です。

新しい学舎と新しい教育

目下、大学では、地上11階地下1階の中央棟と2階の6号館が立ち上がっています。竣工は年末から年明け。中・高は高校棟の設計内容について現在鋭意検討中となっています。生徒が増えた分手狭になっており、早

期の建設が望まれます。大手前中・高は仮校舎がつくられており、文化財の発掘調査がありますが、今のところ順調に推移しています。小学校も地上6階地下1階になる西館の設計図ができており、建設直前の段階までできております。幼稚園は1年半前に美しい校舎が出来上がっており、毎日沢山の園児たちの声に囲まれています。本学院の素晴らしい園舎を見ると、内心日本一の幼稚園だと思ってしまいます。新しい学舎が出来ることはそれ自体で喜ばしいことですが、それに加えて望まれるのは、子どもとともに、それにふさわしい新しい教育が入ることです。

学院施設を追手門ファミリーの拠点に

学院における地域連携の拠点として茨木にリエゾン・オフィスを立ち上げ、茨木市とも協定を結んで北摂地域を中心に連携を進めつつあります。しかし、この組織は残念ながら実質的に大学の拠点に止まっております。これから建設することになる地上6階地下1階の大手前中・高の新学舎最上階には、学院スペースが確保されており、追手門ファミリーの拠点としての学院施設が計画されております。卒業生とのつながりを強め、PTAに活用していただける、また地域との間に相互協力的関係を築くことが可能な活力ある施設を目指し、構想を検討して、既に一部準備を進めていただいております。

お金のある方はお金を、知恵のある方は知恵を、時間のある方や労力を惜しまれない方はそれを。120周年記念事業の推進の中で既にご協力をいただいておりますが、この学院施設は120周年以降の次代を担う拠点となるはずですので、同様のお力添えをお願いしたいと思います。

自己革新の持続によってさらに名門の名を

新しい栄光に向けて…

両中・高で定員割れが生じた時は、名門の凋落を嘆く関係者の声を随分多く耳にしました。志願者が増加し、入学者の確保が可能となり、財政が安定して建設事業を行うところまではしましたが、名門を完全復活するには教育内容を時代に対応して革新しなければなりません。幼小中高全てが名門の名を手にするためには、各学校での自己革新が必要とされますが、それを最終的に担保するのは大学の栄光です。危機感や危険に対する意識を払拭することはできませんが、ここまでの再生プランは想像していた以上に順調に進行してきたというのが実感です。

120周年の年である2008年が名門復活の年、第2の創業の年となるよう、各学校現場の先生方、職員の方に引き続きご努力をお願いするとともに、創立90周年を迎えられる山桜会の皆様方には、山桜会創立90周年と学院創立120周年の記念事業が結び合うことで、関係者全体が合一した新しい光が生まれるようお願いする次第です。